

東コーカサス地方史『エラムの薔薇園』にみる 歴史認識と地理認識

塩野崎 信 也

は じ め に

アッバース・ゴリー・アーガー・ゴドスィー（‘Abbās Qolī Āqā Qodsī/Abbasqulu āga Qūdsi）¹⁾、またの呼び名をバキュハノフ（Bākixānūf/Bakixanov）は、19世紀前半の東コーカサス地方²⁾を代表する知識人である。彼は、1791年までバクー（Bākū/Bakı）の地方君主の地位にあったミールザー・モハンマド・ハーンII世（Mirzā Moḥammad Xān-e t̄ānī）を父に持つ。バキュハノフという呼び名は、Bakı-xan-ovのように分解でき、すなわち、バクーのハーン（xan）に連なる彼の出自に由来している。

現在、彼に対しては「アゼルバイジャンにおける科学的歴史学の祖」[ГИ: 3] など、高い評価が与えられている。また、アゼルバイジャン国立科学アカデミーの歴史学部門は、彼の名を冠して「A・バキュハノフ記念歴史学研究所（A. Bakixanov adına Tarix İnstitutu）」と命名されている。彼は、同国の代表的な歴史家として、重要視されているのである。

バキュハノフは、1794年、バクー近郊の村で生まれた。少年時代は、バクーやグバ（Qobbe/Quba）のウラマーのもとで、イスラーム神学やアラビア語、ペルシア語などを学んだ。1820年にはロシア軍に任官し、翌年から翻訳官としてトビリシのロシア軍司令部での勤務を始めている。1828年のトルコマンチャール条約の交渉会議にも、翻訳官として出席した。1835年以降はグバに居住し、1847年に死去するまで、精力的に執筆活動を行った。彼には、ペルシア語、ロシア語、アラビア語、アゼルバイジャン語の著作があり、その分野も、歴史学、地理学、言語学、論理学、哲学、天文学、詩など、非常に多岐にわたっている³⁾。

そのバキュハノフの代表的な著作が、『エラムの薔薇園 *Golestān-e Eram*』⁴⁾ である。古代から19世紀初頭までの出来事を扱ったペルシア語による「東コーカサス地方史」で、

1) いくつかの人名・地名に関しては、スラッシュを用いて原語を並列記載した。その場合、左はペルシア語による表記を、右はラテン文字のものはアゼルバイジャン語の、キリル文字のものはロシア語の表記を示す。

2) 「東コーカサス地方」という語に関しては後述。

3) 彼の生涯とその作品の詳細は、Ахмедов 1983; GE 2: vii-xv; ГИ: 3-8を参照。

4) エラム（イラム）は、『クルアーン』でも言及される伝説上の地名。「楽園」「理想郷」として連想される。そのため、「エラムの薔薇園」は、「薔薇の咲く理想郷」「地上の楽園」といった意味になる。

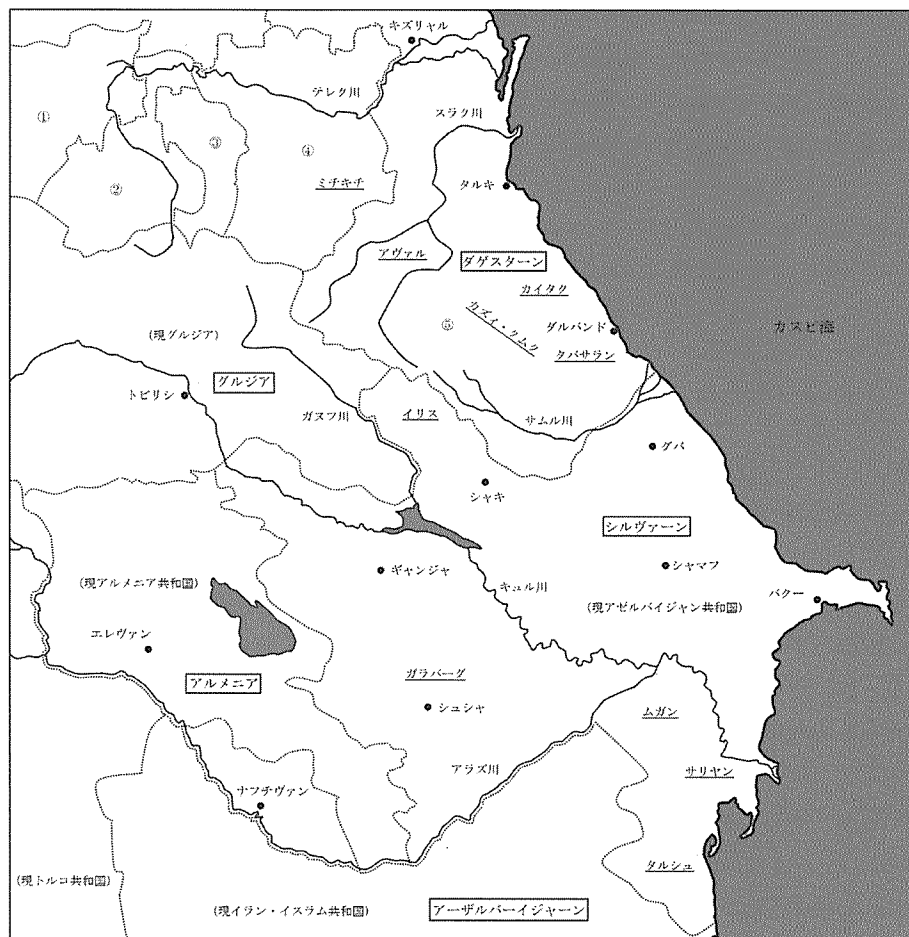


図1 東コーカサス地方とその周辺

点線は現在の国境 (①～⑤は現ロシア連邦: ①カバルダ・バイカル共和国 ②北オセチア・アラニア共和国 ③イングーシ共和国 ④チェチェン共和国 ⑤ダゲスタン共和国)

1841年に完成した。とりわけ18世紀後半を扱った第5章は、利用価値が高い。

本稿は、その前文および序章の全訳である。前文では、歴史学の意義や方法論、『エラムの薔薇園』の執筆意図が提示される。序章は、東コーカサス地方の歴史・地誌の概略である。彼の歴史認識・地理認識が端的に表れているこれらの箇所を翻訳を示すことで、19世紀前半のコーカサス地方における一知識人の内面世界を窺い知ることが可能となろう。

I 解題：バキュハノフと『エラムの薔薇園』

1 底本について

筆者の知る限り、『エラムの薔薇園』には3種類の校定本が存在する [GE1, GE2, GE3]。

これらは全て、アリーザーデ氏の校定によるものであり、本文の内容は基本的に同一である。今回の翻訳に際しては、出版年が比較的新しく、より写本の表記に忠実で、丁寧な編集が行われている GE 2 を底本として利用した。

また、補助的にはあるが、2冊の写本も利用した [M-49, B-2268]。ともにアゼルバイジャン国立科学アカデミーの M・フズズリー記念写本研究所に保管されているもので、上述の校定本でも利用されている。M-49 は、17 × 20 cm, 121 葉であり、1260/1844 年に完成した。B-2268 は、18 × 23 cm, 77 葉であり、完成年は不明である。

『エラムの薔薇園』には、バキュハノフ自身の手によるロシア語訳が存在し、ブニャトフ氏の編註によって刊行されている [ГН]。その内容は、基本的にペルシア語版と一致するが、興味深い相違点も見られる。また、現代アゼルバイジャン語への翻訳（一部は抄訳）もされており、ラテン文字表記のもの [Əskərli (tr.) 2000] とキリル文字表記のもの [Әскәрли (пер.) 2001] が出版されている。

また、2009 年 12 月には、英語への全訳（底本は GE 1）も出版された [Floor & Javadi (tr.) 2009]。しかし、その出版が本稿の準備期間と前後したこともあり、今回の訳出にあたっては確認程度に利用したのみである。非常に優れた翻訳ではあるが、一方で、原文に忠実な翻訳とは言い難い箇所や、筆者の訳とは解釈が異なる箇所がところどころに見られる。ただし、紙幅の関係もあり、それらを 1 つ 1 つ指摘することはしていない。

2 文体の特徴

『エラムの薔薇園』は、非常に簡潔な文体で書かれている。同時代や先行する時代のペルシア語史書に多く見られる、美文調の比喩表現や、対句、韻にこだわった表現は、ほとんど使われていない（前文のみ例外で、美文表現が多く見られる）。この点に関しては、著者自身が「平易で簡潔な表現によって内容を記述」した、と述べている通りである [GE 2 : 3]。一方で、『エラムの薔薇園』では、単語の省略が非常に多く、語法に独特な部分もあるため、必ずしも読解は容易ではない。

次に年代表記に関して。『エラムの薔薇園』では、多くの場合、「年」を意味する سنة (sane) という単語の上下に数字で年代が記される。写本によって、また、箇所によって異なるが、多くの場合、上にヒジュラ年、下にユリウス年が記される。また、その後さらにペルシア語の数詞を用いて、あらためてヒジュラ年が記される場合が多い（図 2 参照）。まずヒジュラ暦を示し、そこにユリウス暦を付け加えるという年代表記の方法は、ロシア語版でも同様である。また、第 5 章では月日まで記されることが増えるが、その場合、ヒジュラ太陰暦ではなく、ユリウス暦による日付が用いられている。

『エラムの薔薇園』には、ロシア語に由来する単語が多く導入されている。それらの語の転写に関して例外なく当てはまる規則を見出だすことはできないが、大まかに言って、次のような傾向が見られる。まず、ロシア語において母音が付される箇所には、長母音を示すア



図2 年代表記の例

ラビア文字があてられる場合が多い。ただし、無アクセントの母音（とりわけ軟母音）は、文字表記上、しばしば無視される。例えば、Екатерина は YQA Ṭ RYNA, генерал-майор Булгаков は JNRAL MAYVR BVLĠAKVF, Прокопий は PRAKV PY と転写される [GE 2 : 13, 209, 226]。これらは、それぞれ Yaqāṭarinā, Janarāl Māyūr Būlgākūf, Prākūpī のように、短母音を適切な箇所に補いつつ読むものと思われる。

この例からも分かるように、バキュハノフの転写法は、単純な文字の置き換えではない。語末子音の無声化をはじめとするロシア語の発音規則は基本的に守られ、また、軟子音と硬子音の区別、無アクセント母音の発音変化なども意識されているように思われる。綴り字のある程度意識しながらも、実際の発音の方をより重視した転写法であると言えよう。

3 バキュハノフの語る「歴史学」

バキュハノフは、『エラムの薔薇園』を「歴史学 (‘elm-e tārix)」の作品とし、その意義や方法論を、前文において簡潔に解説している [GE 2 : 2-4]。彼は、「過去の出来事の経緯こそ、未来への訓示」と喝破し、「歴史学は、人々を、品行の方正さと学識への通暁、実生活における利益と慎み深い教養へと導く」と言明する。すなわち、教養・学識の獲得と、現在や未来に対する教訓が、歴史学の目的と論ずるのである。

そして、彼は、「諸々の事件の前後関係に留意すること」、「特定の民族に対する臆目や、特定の国に対する支持を避けること」、「信頼のおける言葉をそれぞれの内容の論拠とすること」を心掛けたと述べる。また、叙述の情報源、すなわち史料として彼が利用したのは、「様々な著作物、スルターンたちの勅令、貨幣の銘文、建物の遺構、色々な人々の発言」である。そして、それぞれの情報に相違が生じた場合は、「理性に基づいた類推と推論の力に頼」った、としている。このあたりは、現在の歴史学の方法論と通ずる点も多い。

さらに、「実際の出来事の話の他に、架空の話もまた我々にとって好ましい」とする。実際、彼はこういった神話的・伝説的な情報を多く収集し、読者にその一部を紹介している。しかしながら、それらは、あくまでも“伝説”として紹介されるのみであり、“歴史的な事実”とは明確に区別されている。その意味でも、『エラムの薔薇園』の記述は、「理性に基づいた」とする彼の言葉に違わぬものとなっている。

フィクショナルな要素に対する彼の態度が端的に窺えるのが、18 世紀後半のグバの地方君主、ファトフ・アリー・ハーン (Fath ‘Alī Xān) [cf. 塩野崎 2010] の出自に関する記述

である。バキュハノフの父ミールザー・モハンマド・ハーンⅡ世は、ファトフ・アリー・ハーンの甥（姉妹の子）であると同時に、娘婿でもあった⁵⁾。バキュハノフは、自身とも深い血縁関係を持つこの人物に対して、崇敬・憧憬の念を少なからず抱いていたようである。

さて、18世紀後半から19世紀前半に書かれたペルシア語文献の中には、ファトフ・アリー・ハーンの出自に触れているものがある。それらは、例えば、「その系譜はアヌーシーラワーン⁶⁾にまで遡る」[MT: 190], 「殉教したサイドであるハムザ⁷⁾の娘の子孫、と言われる」[BS: 415] など、伝説的な要素を多く含むものである。一方で、『エラムの薔薇園』に記された彼の系譜は、17世紀後半にグバ知事に任命されたホセイン・ハーンに遡るのみで、上で述べたような情報には一切触れていない[GE 2: 156–157]。バキュハノフの理性的・実証的な学問態度が際立つ事例と言えよう。

さて、『エラムの薔薇園』の本文は、非常に多様な情報源に基づいて記述されている。注目すべきは、それら情報源の中に、古代ギリシア・ローマの著作家たちの作品や、同時代におけるヨーロッパの東洋学者たちの研究成果が含まれている点である。これらの“新知識”は、ロシアを経由してもたらされたものであった。そして、バキュハノフは、“伝統的”なイスラーム世界の学問を基本としつつも、時にその不足部分を“新知識”によって補い、時に両者の成果を折衷することで、自身の歴史観を形成しているのである[cf. ГИ: 4]。

ペルシア語史書におけるヨーロッパ東洋学の影響に関しては、守川氏が分析を行っている[守川 2007: 27–35; 守川 2010]。氏は、ペルシア語の普遍史においてヨーロッパの学問の知識を取り入れた最初期の事例として、エエテマード・アッサルタネの作品『イランの歴史』(1876年出版)を挙げている。しかし、『エラムの薔薇園』は、それに30年以上先行して、ヨーロッパ東洋学の成果を取り入れているのである。コーカサスという地域の特異性や、普遍史と地方史という違いはあるものの、興味深い事例と言えよう。

4 バキュハノフの歴史・地理認識

『エラムの薔薇園』は、「東コーカサス地方」と呼称すべき領域を叙述の対象としている⁸⁾。大まかに言って、これは、現在のアゼルバイジャン共和国、及びロシア連邦ダゲスタン共和国やチェチェン共和国などに相当する領域である。ただし、テレク川以北は「東コーカサス地方」に含まれない。また、キュル川以西、すなわち、ギャンジャ (Ganje/Gəncə) やガ

5) ただし、バキュハノフの母は、ファトフ・アリー・ハーンの子と別れた女性。

6) 本稿註18を参照。

7) 預言者ムハンマドの叔父であるハムザ・ブン・アブド・アルムッタリブ (Hamza b. 'Abd al-Muṭṭalib) を指すと思われる。

8) 先行研究では、例えばアトキン氏が「東コーカサス地方 (Eastern Caucasus)」を定義し、分析に用いている [Atkin 1980: xi]。しかし、それが指す領域は、本稿で用いるものと異なる。

ラバーク (Qarābāg/Qarabağ) といった地域が「東コーカサス地方」に含まれるか否かは、不明瞭である。第5章や終章の叙述からは、これらの地域もまた「東コーカサス地方」の一部とみなされているように思われる [GE 2 : 198-289]。一方、序章の記述によるなら、キュル川以西は「東コーカサス地方」の領域外である。

さて、バキュハノフ自身は、上述の領域を「シルヴァーン (Šīrvān) 地方とダゲスターン (Dāgestān) 地方」などと呼び、両地方を合わせた呼び名は、特に設定していない。しかし、本文の内容から、彼がこの両地方を一体のものと認識していたことは明らかである。ロシア語版『エラムの薔薇園』が、当初『コーカサス地方東部の歴史 *История восточной части Кавказа*』という書名であった [ГИ : 4-6] ということから、それが窺えよう。また、ロシア語版には、両地方を指して「コーカサス地方東部 (восточная часть Кавказа)」と表現している箇所が存在する [ГИ : 26]。

キュル川以西の地域とシルヴァーン地方との一体性が明確になっていないという点は、「アゼルバイジャン」という地理概念の成立過程を考える上で、非常に興味深い事例である。また、『エラムの薔薇園』においては、これらの地域に「アゼルバイジャン (Ādarbāyjān)」という呼称が用いられることはなく、現在強調されがちなアーザルバーイジャン地方⁹⁾との連続性も、特に意識されていない¹⁰⁾。

また、現在「アゼルバイジャン語」と称されるこの地方の言語も、「テュルク語群に属し、アルメニア地方やアーザルバーイジャン地方の全域、イランの大半に分布しているそれと同様のもの」と呼ばれ、「オスマン語、チャガタイ語、クムク語、ノガイ語の中間である」とされているのみで、それ自体の固有の名は与えられていない [GE 2 : 22]¹¹⁾。同様に、「アゼルバイジャン人」という民族名も見ることとはできず、「ペルシア人、アラブ人、モンゴル人、タタール人の血統が混ざり合った人々」、「主にテュルクメン人やモンゴル人やタタール人の血統」などとされるのみである [GE 2 : 17, 22]。

ところで、『エラムの薔薇園』は、「コーカサス」という地名をしばしば用いている。この

9) タブリーズを中心とする地方で、現在のイラン・イスラム共和国の北西部3州、すなわち、東西アーザルバーイジャン州、アルダビール州に相当する。現在のアゼルバイジャン共和国と対比して、「南アゼルバイジャン」とも呼ばれる。歴史的に「アゼルバイジャン」と呼称されてきたのは、こちらの地方である。なお、本稿では混同を避けるために、この地方に対し、ペルシア語の発音に近い「アーザルバーイジャン」という表記を用いる。

10) 一方で、この時代には既にシルヴァーン地方を「アゼルバイジャン」と呼称している事例が存在している。例えば、1211/1796-7年に完成したペルシア語史書『ムハンマド史』には、シルヴァーン地方やガラバーク地方などを曖昧に示して「アゼルバイジャン」と呼称している箇所がある [TMh : 265-266, 299]。

11) 一方で、この時代には既に「アゼルバイジャン語」に該当する表現が存在している。例えば、1844年に書かれた『ダルバンドの書』の序文には、「アゼルバイジャン方言 (Aderbijanian dialect)」という表現が見られる [DN : xxiii]

語は、現代のペルシア語においては Qafqāz と表記されるが、バキュハノフは、Qāfqās という表記を用いている。この表記は、ロシア語における呼称「カフカス（Кавказ）」に基づくものと思われ、先述したロシア語の転写法にも一致している。

『エラムの薔薇園』において、「コーカサス」は、主に山脈の名として使用され、一部で地方の名として用いられている。しかし、地方名としての「コーカサス」、あるいは「コーカサス地方」という地理概念は、それほど強調されていないように思われる。また、「南コーカサス（トランスコーカサス、ザカフカス）」に該当する地理認識は見られない。グルジアやアルメニアの歴史は、東コーカサス地方との関係史において言及される程度である。コーカサスを南北で区分する現在の地理認識とは、対照的な地理認識と言えよう。

II 翻訳：前文および序章

【凡例】

- ・原語の表記を示す際には、（ ）を用いた。
- ・原文に無い語を補う際や、補足説明を挿入する際には、[] を用いた。
- ・特定の写本にしか無い箇所を示す際には、〔 〕を用いた。

（p. 1）慈悲あまねく、慈愛深きアッラーの御名において

〔本書は、ダゲスターンの諸々の出来事に関する『エラムの薔薇園』である〕[M-49: 1 b]

おお神よ、あなた様への賛美が、あなた様をご存知のごとくに〔表されますよう〕。あなた様への賞賛の言葉（vaṣf）が、あなた様がそれで十分とみなすほどに満ち溢れ〔ますよう〕。我々の賛美が理解力の及ぶ限り〔表され〕、あなた様への賞賛の言葉が想像力の〔及ぶ限り〕述べられていることが、我々から〔あなた様に〕伝わりますよう。〔我々のうちで誰よりも完全な者とは、この点について、自らの至らなさを認める者である。〔真の〕学識ある人々は、知識を驚くほどに有しているものだ。〕[B-2268: 1 b]

四行詩

あなた様を知ること、難題の湧き出す泉

〔あなた様の〕性質を詳細に描くことは、〔その〕本性を明白とすること

我々は、無知のままでいることを受け入れはしない

なんとなれば、それは、存在物の誉れの土台であるのだから〔ハザジュ体〕

さて、そこで、歴史学（‘elm-e tārix）である。我々の本性は、何にも増して、それに傾倒している。実際の出来事の話の他に、架空の話もまた、〔我々にとって〕好ましいものである。歴史学は、人々を、品行の方正さと学識への通曉、実生活における利益と慎み深い教養へと導くのである。

このような理由で、それ〔＝歴史学〕は高貴なる精神の諸学問（‘olūm-e reyḥāni）の 1

つとみなされる。また、次のように言うこともできるだろう。[歴史学とは、] 横暴や圧制を行わない支配者であり、人類の様々な階層の者がその命令に頭を下げる。その学び舎においては、世界中の教師たちすらも、向上心旺盛で活気に溢れた学童である。[また、歴史学は] 生気を吹き込む者¹²⁾であり、数千年前の死者をも、一息で生き返らせる。そして、数々の時代の様々な部族たちのそれぞれを、あたかも復活の日 [における最後の審判] のように、それぞれの服装、気質、習慣、また友好的であったか敵対的であったかという背景によって、一列ずつ、行いを記録した帳面 (nāme-ye a'māl) を手にして等級づける。そして、(p. 2) 偏見無しに譴責したり称揚したりすることで、彼ら自身の善行や悪行の報いを傍聴人たちに示すのだ。また、もの言わぬ語り手 (xānūš) でもあり、子孫たちに先祖たちの教訓を、あらゆる詳細や細部とともに語り、貧困と富裕の原因、進歩と退行の要因を理解せしめる。未来のあり様という身体を、過去という衣に [包み]、教訓を導き出すのだ。

さよう、過去の出来事の経緯こそ、未来への訓示。学問に基づいた行いは、永遠のものとなろう。なんとなれば、時代の変転に通曉せずに物事を始めることは、苦難に満ちた道無き荒野へと向かうことなのだから。自身の生涯の短い期間で [多くの] 経験を積もうとする者は、それ [=歴史学] から多大な利益を得ることになる。歴史学は、世界 [中の人々] の生涯の経験を、我々に見せてくれる。

これ [=歴史学]、とりわけ、そこで暮らす民のための、それぞれの地方の歴史よりも良いものが何かあるだろうか。なんとなれば、その民族自身の天性や特性といった特徴を知らせ、近隣の諸部族の行いや様々な人々との結びつきの結果を伝えることは、利益と損失の原則を我々に明らかにするのだから。

そういった訳で、欠くべからざる教導の探究において過ち多き小生 (ḥaqir-e por-taqşir dar lavāzem-e eršād-jūyi) こと、ゴドスィーの [筆] 名で知られる、バクーのミールザー・モハンマド・ハーン II 世の息子、アッバース・ゴリーは、シルヴァーン地方とダゲスタン地方、及びその周辺で生じた様々な時代の種々の出来事を収集し、ことの困難が想起されるにもかかわらず、書物の執筆に取り掛かったのだ。真理をご存知の読者たちにおかれては、本書の不備や欠陥を、不十分な [執筆] 時間や [著者の] 才覚の欠如、著者の状況の混乱、そして何よりも、至らぬ点の多い者 [である小生] の [力] 不足へと帰していただき、その修正と訂正に努めていただければ幸いである。

本書の著者による [韻文作品]

他者の欠点を覆い隠すことは、素晴らしい行いである

この立派な賜衣は、どんな人のいかなる欠点をも覆ってしまう [ハザジュ体]

12) 原文では、「生気が無い者 (bī-ḥayāt)」とあるが、このままでは意味が通らない。ロシア語版の該当箇所は、「新たな生命を吹き込む者のごとく (как новый жизнедатель)」、それ [=歴史学] は我々の前に数千年前の死者たちを蘇らせる」[ГИ: 9] となっており、そこから類推した。

どの地方のものであれ、[過去の] 情報を伝える書物や、[過去の] 痕跡となっている遺物は、過去の諸々の出来事を、然るべき順序や区切り方 (tartib va tafşili ke šâyad) によって (p. 3) 説明するという段階にまで到らしめることができない。種々の諸部族の出入や占有のために騒乱と混乱の地であり続け、多くの情報を伝える書物や書簡、建築物や遺物が、消滅 [してしまった品々を並べる] 展示場へと入ってしまったこの地方においては、とりわけ [そうである]。他の民族に関する書物もまた、誰の作品であれ、やはりその内容を望ましい形では叙述していないのだ。

そうであるにもかかわらず、「あるものの全てを得ることが叶わなくとも、その全てが捨て去られることはない (mā lā yudraku kullu-hu, lā yutraku kullu-hu)」という警句に従い、この仕事 [=シルヴァーン及びダゲスタン地方史の叙述] に役立つ情報源 (asbāb-e in kār) のうち、可能な限りのものを入手し、多様な内容を互に関連付けた。そして、現存する遺物の数々を、それについて伝えられるところの情報と照合した。

そして、歴史の著述において屋台骨となる以下のごとき作法を可能な限り実行した。すなわち、平易で簡潔な表現によって内容を記述すること、諸々の事件の前後関係 (tadrij va rabṭ-e vaqāye') に留意すること、[特定の] 民族に対する最良目や、[特定の] 国に対する支持を避けること、信頼のおける言葉をそれぞれの内容の論拠とすること (esnād)、様々な著作物、スルターンたちの勅令、貨幣の銘文 (sekke-ye vojūh)、建物の遺構、色々な人々の発言を主題へと結びつけること、などである。そして、相違が生じた箇所は、理性に基づいた類推と推論の力に頼り、[この] 書物の大枠を、序章と5つの章と終章と定めた。

本書の著者による [韻文作品]

[この作品] 自体の業 (fann) によって、この写本 [の内容] が説明されている

本書は歴史書である。著述が完了した年の [示すが] ごとくに¹³⁾

私は、『エラムの薔薇園』をその名とした

そう呼ばれるにふさわしい名を付けたのだ [ハザジュ体] (p. 4)

序章 シルヴァーン地方とダゲスタン地方の境域 (ḥodūd) と土地、[土地や部族の] 名

称の由来 (sabab-e tasmiye)、血統 (nasb) のあり様や諸言語、諸宗教に関する叙述

第1章 古代のシルヴァーンとダゲスタンの状況から、イスラームの王朝 (dowlat-e Eslām) が出現しアラブの軍勢が到来するまでの記述

第2章 アラブの軍勢の到来開始から、モンゴル (Moğul) の征服まで

第3章 モンゴルの征服からサファヴィー朝 (Şafaviyān) の登場 [まで]。シルヴァーン・シャー王朝 (Širvān-šāhān) の王権と系譜の状況

13) 「本書は歴史書である (hiya al-tārixu)」に用いられている文字の数値を全て足すと、1257 になるが、これは本書の執筆年にあたる (ヒジュラ暦 1257 年、すなわち西暦 1841 年)。

第4章 サファヴィー朝の登場から、ナーデル・シャーの死まで

第5章 ナーデル・シャーの死から、ゴレスターンの地におけるロシアとイランの両政府による和平の締結まで

終章 シルヴァーン地方とその周辺の地域〔の人物〕のうち、著作を行っている者や、その他の美点によって書き記すにふさわしい人物たちのあり様に関して¹⁴⁾

序章 シルヴァーン地方とダゲスターン地方の境域と土地、〔土地や部族の〕名称の由来、血統のあり様や諸言語、諸宗教に関する叙述

シルヴァーン地方は、東側をハザルの海 (daryā-ye Xazar) [=カスピ海] によって、南西の方向をキュル (Kor) 川 —— この地をムガン (Mogān) とアルメニア (Arman) の両地方から区切っている —— によって、北西の方面をガヌフ (Qāneq) 川によって、また、イリス (Īlis) 地方とコーカサスの高原地帯 (pošte-ye boland-e Qāfqās) と山脈地帯 —— この山脈は、キュレ (Küre) 及びタバサラン (Ṭabarsarān) 地方を (p. 5) カズィ・クムク (Ġāzī Qomūq) 及びカイタク (Qeyṭāq) の王国から区けている —— からなる不明瞭な境界線 (xaṭṭ-e ġeyr-mo'ayyan) によって、そして、そこからはダルヴァグ (Darvāq) 川の川筋によって —— その川がハザルの海に流れ込む場所に到るまで ——、囲まれている。大まかに言って、キュル川の河口からダルヴァグ川の河口までが北緯 39 度から 42 度に、ガヌフ川の河口からアプシェロン岬 (ra's al-jabal-e Afšarān) までが東経 64 度から 68 度にわたっている¹⁵⁾。

〔緯度と経度の〕1 度 1 度の距離は、直線にして約 15 地理マイル (mil-e joġrāfi) である。1 地理マイルは、7 ヴェルスタ (vers-e Rūsī), あるいは 1 ファルサング半である。1 ファルサングは 3 イスラーム・マイル (mil-e eslāmī) [=ミール] であり、〔1〕イスラーム・マイルは 96,000 アンゴシュト (angošt) である。〔1〕アンゴシュト〔の長さ〕は、平均的な大麦の粒を横にぴったり並べた場合¹⁶⁾の 6 粒分である¹⁷⁾。

このため、現在におけるシルヴァーンの諸王国は、サリヤン (Sāliyān), シャキ (Šakki), バクー, グバ, ダルバンド (Darband), タバサラン, キュレ, サムル川流域

14) B-2268 では、「終章：シルヴァーンのハーンが治める諸王国や、ダゲスターンの国々や諸集団の状況について」となっている [B-2268: 2 b]。しかし、この写本は第5章の途中で終わっており、終章に当たる部分は含まれていない。

15) ロシア語版では、「アプシェロン岬からガヌフ川の河口までが、東経 64 度から 67 度までである」となっており、数字に若干の差異が見られる [ГИ: 11]。なお、現代の知識に基づけば、ガヌフ川の河口がおおよそ東経 46 度 50 分、アプシェロン半島の東端がおおよそ東経 50 度 30 分である。

16) 原文を直訳すると、「ある粒の背を、別の粒の腹に隣接させたら (pošt-e yekī be-bāṭan-e digarī molāšeḡ bāšad)」となる。なお、本文の記述を総合すると 1 アンゴシュト $\approx$ 2 cm となるが、これは Hinz 1970 などの知識と一致する [Hinz 1970: 54, 62-3]。

17) 緯度と経度の意味について解説されたこの段落は、ロシア語版や B-2268 写本には存在しない。

(nāḥiye-ye Samūriye), 下イリス (pāyin-e Īlisū) の一部がそこに含まれる。この一帯 (diyār) の諸地方の中では、最も広大で、最も素晴らしい [地方である]。また、コーカサスの山々からなる大山脈は、この地において、南東へと方向を変える。[この山脈には、] 過ごしやすい気候で牧草が生い茂った夏营地や、甘い水の泉、[北と南の] 両方向に向かって流れる多くの川がある。主として、[ハザルの] 海の沿岸とキュル川流域にある肥沃で広大な空漠たる平原が、豊富な穀物や森林 [資源] や果樹園 [の収穫物]、その他の産物をもたらしている。また、[ハザルの] 海の沿岸というこの地方そのものの位置のために、ロシアとイラン、あるいは、ダゲスタンの多種多様な諸民族の間における交易活動もまた、この地方では非常に盛んである。

『諸都市の地理 (Taqvim al-boldān)』の著者は、「シルヴァーンは、ササン朝の公正なるアヌーシーラワーン (Anūšīravān-e ‘Ādel-e Sāsānī)¹⁸⁾ が建設した。そのために、シルヴァーンの名で知られる¹⁹⁾。『アヌー』の語は、多くの用例で省略される」と記す [cf. Abū al-Fidā’: 397]。 (p. 6) 『『ライオン (Šīr) の地』を意味する『シールヴァーンド (Šīr-vānd)』であったものが、最終的にシルヴァーンに変化した』と言う者もいる。モヴセス・ホレナツィ²⁰⁾の歴史書や、『ザンド・アヴェスター』の書 (ketāb-e Zand va Avestā)²¹⁾ では、「シャルーヴァーンラー (Šarūvānrā?)²²⁾」として知られる。アミン・アフマド (Amin Aḥmad) は、『七気候帯 (Haft eqrīm)』において、「シルヴァーンは、当初は町の名であったが、その後、地方の名となった」と記す [cf. HE: 268]。チャムチャン (Čāmčiyān) は『アルメニア史 (Tārix-e Armanīye)』において、シルヴァーン地方を「アグヴァン (Ağvān)」と呼び、「同地方とアラン (Ālān)、すなわちダゲスタンとの境界は、当初は『アルゴンの防壁 (Sadd-e Ālgūn)』、後には『ダルバンドの防壁 (Sadd-e Darband)』であった」とする。また、テュルクメン人 (Torkmān) の帝王、スルターン・ヤクープ・ブン・ハサン (Soltān Ya’qūb b. Ḥasan)²³⁾ が [ヒジュラ暦] 892 年 / [西暦] 1487 年

18) ササン朝君主ホスロー I 世 (r. 531–579) のこと。「ヌーシーラワーン (Nūšīravān)」とも表記され、本書においても、両方の表記が用いられている。また、「ヌーシーラワーン・ブン・クバード (Nūšīravān b. Qobād)」とも呼ばれる。

19) 本稿では、カタカナ転写の都合上「シルヴァーン」と「(アヌー) シーラワーン」という相違が生じているが、ペルシア語では、どちらも شیروان で、全く同一の綴りの語である。

20) このアルメニア人歴史家の名は、原文では「ムーサー・フーランスキー (Mūsā Xūranskī)」となっている。また、ロシア語版の表記は、「モイセイ・ホレンスキー (Моисей Хоренский)」である [ГИ: 11]。ペルシア語版の「フーランスキー」は、このロシア語形の音写であろう。

21) B-2268 写本では、『ザンド・アヴェスター』の書」の部分が「ゾロアスターによる『ザンド』の書 (ketāb-e Zand-e Zardošti)」となっている [B-2268: 3a]。

22) ロシア語版では「シェラヴァネル (Шераванер)」、アゼルバイジャン語訳では「シャロヴァネル (Şərovaner)」、英語訳では「シルヴァン (Shiruvan)」となっている [ГИ: 11; Əskərli (tr.) 2000: 7; Floor & Javadi (tr.) 2009: 6]。

23) アクココンル朝君主ヤクープ・ブン・ウズン・ハサン (r. 1479/80–1490/91)。

にアルメニアの首長 (xalife) であるシメオン (Sema'on/Симеон [ГИ: 12]) に発した命令書において、シルヴァーンは「アグヴァン」と呼ばれている。

ダゲスターン地方は、北緯 42 度から 44 度、東経 63 度から 66 度にわたっている。東側はハザルの海によって、北側はテレク (Tarak) 川によって、西の方はチェルケス人 (Čarkas) とオセッт人 (Ūs) の国によって、南西方面はグルジア (Gorjestān) によって、南東の方角はシルヴァーンによって囲まれている。その北東部は、程良い地勢 (ḥosn-e makāniyat) と生活手段の豊富さによって知られ、とりわけ [ハザルの] 海の沿岸部やテレク川流域では、川がたくさんあり、往来も多いため、農作物の収穫や交易による利益に恵まれている。その他の部分は山地であり、素晴らしい涸れ谷や夏营地の一部に産物をもたらす場所があるとはいえ、概して非常に困窮しており、そこでの生活は困難を極める。

マスウディー (Mas'ūdi) の言によると、ヒジュラ暦 332 年 / [西暦] 944 年、この地方には 3 つの王国があった。それは、次の通りである [cf. MD: 184–215]。

第 1 は、カイクタクであり、ダルバンドの北側に位置する。その首邑 (ḥokūmat-gāh) はサマンドル (Samandar), すなわちタルキ (Tārxū) である。ヌーシーラワーンがそれを建設し、ハザルのハカン (xāqān) の首都 (pāy-taxt) とされていた。スライマーン・ブン・ラビーア (Soleymān b. Rabī'e) が (p. 7) これを占領し、ハカンはその首都をイティル (Etel) に移した。サマンドルの住民は、主にハザル人であり、イスラーム教徒 [のハザル人] もユダヤ教徒 [のハザル人] もいる。イブン・ハウカル (Ibn Ḥawqal) は、「ルス (Rūs) の一族は、ヒジュラ暦 358 年 / [西暦] 969 年にサマンドルを占拠した。そこにあった多くの建造物や庭園を荒廃させた」と記している²⁴⁾。

第 2 は、サリル (Sarir) である。ダルバンドから 3 日行程だけ北西に [位置し、その人口は] 1 万 2 千家族である。サリルの王は、フィーラーン・シャー (Filān-šāh) と呼ばれ、キリスト教に帰依している。一部の者の言によると、ササン朝のヤズデギルド [Ⅲ世] は、アラブ人たちに敗れてホラーサーン (Xorāsān) に逃げる際、自身の黄金の玉座を、その他の貴重品とともに、バフラーム・チュービン (Bahrām-e Čūbīn)²⁵⁾ の家系に連なる重臣の 1 人 [に託し]、「勝利の山々 (Jebāl-e Fath)」, すなわちコーカサス [山脈] へと送った。その重臣は、現在サリルと呼称されるところの国を占領し、自身の子孫に [その地位を] 譲った。一方、ニザーミー (Neẓāmī) の言によると、その地名は、ケイホスロウの王冠と玉座 (taxt) に由来する²⁶⁾。この地の、ある洞穴の中に [その玉座と王冠が] あったからで

24) ただし、イブン・ハウカルによると、358 年は、彼がゴルガン (Jurjān) において、サマンドルに関する情報を得た年である。ルスのサマンドル襲撃が何年の出来事かは、明記されていない [Ibn Ḥawqal: 393]。

25) ササン朝君主バフラーム VI 世 (r. 590–591)。

26) cf. Neẓāmī: 1028. 明示されていないが、「玉座 (sarir)」が語源ということであろう。

ある。この地域の支配者たちは、黄金の玉座に座って統治を行っていた、と言う者もいる。サリルの首領 (amīr) は、自身の民を自身の奴隷とみなしていた。そして、ハザル人たち [の土地] に向かって行つては、掠奪を行っていた。山岳の民は平原の民よりも勇敢であったがためである。サリルの近くには、ズィリフゲラン (Zerehgarān) の国がある。現在では、クバチ (Kūbačī) という名であり、イスラーム教徒とキリスト教徒とユダヤ教徒がいる。

第3は、クムク (Qomūq) 山地である。サリルの北側、カイタクの西側にあり、キリスト教に帰依している。複数の長 (ro'asā) に服従しており、彼らには [ただ一人の] 王 (pādšāh) はいない。彼らは、この地から、産物と収穫物に満ち満ちたアランの国へと行く。1羽の雄鶏が鳴くと、[村同士の距離の] 近さのために、すべての村々の雄鶏たちが鳴き声を上げる。アランの王は、「ギャルギャランダージュ (Gargarandāj)」もしくは「キャルクアンダーチュ (Karkandāč)」という称号を、その妻は「マガス (mağas)」という称号を与えられている。彼は、3万名の騎兵軍を所有している。その祖先の1人は、アッバース朝統治期の最初の100年間に、キリスト教を受け入れた。それ以前には、火を崇拝していた。しかし、[ヒジュラ暦] 320年/[西暦] 932年には、(p. 8) この宗教を放棄し、ローマ皇帝が彼らのために派遣していた司祭たちを追放した。

アランと勝利の山々の間には、1つの城がある。山の頂の川岸にあり、橋がかかっている。これは、「アランの門の砦 (Heṣn-e bāb-e Ālān)」と呼ばれる。山を越えるには、ここを通るしかない。この砦は、堅固において並ぶもののない城であり、ペルシア詩人たちがよく題材にしている。イスファンディヤール (Esfandiyār) の命令によって建設された。マスラマ・ブン・アブド・アルマリク (Maslame b. 'Abd al-Malek) は、コーカサスの大部分の土地を服従させた時、アラブ人の衛兵をここに残した。現在に到るまで、彼らには、境界の町であるトビリシ (Teflis) から俸給と必要な品々が送られている。「ラーズィカ門 (bāb-e Lāzeqe)」もまた、グルジア地方にある。その王はイスラーム教徒である。

アランの西方には、偶像を崇拝するケシュク (Kašak) 族がいる。ケシュクの国は、勝利の山々からポント (Pūnt) 海、すなわち黒海にまで広がっている。彼らは、容姿端麗な部族である。「ターラー (tālā)」の名で知られる布地がこの地で作られるが、この布地はエジプト (Meṣr) [のもの] よりはるかに上等である。彼らとトラブゾン (Ṭarabizūn?) との間では、海路を通じた商人たちの往来がある。彼らは、海岸に多くの城を持ち、アランの襲撃の際には、[そこに] 立てこもる。彼らは、数は多いがバラバラの集団である。もしも彼らがまとまれば、誰に対しても勝利するであろう。

彼らの国の向こう側には、サボウ・ボルダーン (Sabo' Boldān) がある。また、筆者が思うに、「アランの門 (Bāb-e Ālān [=Bāb al-Lān])」とは、ダルヤル (Daryal) のアラビア語における呼称であろう。高峻な場所に橋と城があり、現在でも残っている。これらの

地に対するイラン人の支配は、[以下に示す] 多くの類似の事例によって明白となる [だろう]。そもそも、ダルヤルそれ自体が古代ペルシア語である²⁷⁾。また、ケイシャーヴォル (Keyšāvor) 山は、元来、シャープール (Šāpūr) あるいはケイシャール (Keyšābūr) 山であり、パッサナーヴォル (Passanāvor) の地は、[元来、] パスィーン・アヴァール (Pasīn-āvar) であった。

オセットの民は、古代ペルシア語の動詞や基本的な名詞のうちの多くの単語を若干変化させて、いまだに [自分たちの] 口語としており、自分たちのことを「イールーニー (Īrūni)」, オセット人の国を「イールーネスターン (Īrūnestān)」と呼んでいる。ペルシア人 (ahl-e Fārs) が会話の中で、「イラーニー (Īrāni) [=イラン人]」を「イールーニー」と言うのと同じである。また、ケシエ族とは、チェルケス人のことである。昔のロシアの歴史家たちが彼らをカソグ (Kāsūk/Kacor [ГИ: 14]) と、また現在でもオセットの民をカッサチ (Kāssāk?/Кассачи [ГИ: 14]) と呼んでいるのと同じである。(p. 9)

モハンマド・ラフィーウ・ブン・アブド・アッラヒーム・シルヴァーニー (Moḥammad Rafī' b. 'Abd al-Raḥīm Šīrvānī) がその歴史書²⁸⁾で記したところによると、[ダゲスターン地方には] 同様に3つの王国がある。1つ目はデシュト (Dašt), 2つ目はズィリフゲランである。3つ目はアヴァール (Āvār) であり、生活や通行が最も困難な王国である。

チャムチャンは自身の歴史書で、この地方の中に4つの王国の名を挙げている。アラン、バスラス (Bāslās), ハプタグ (Hāptāq), フン (Hūn) である。

『ダルバンドの書 (Darband-nāme)』の著者によると、イスファンディヤールとヌーシーラワーンの決定によって4つの王国に分割され、[それは] ゲルバフ (Galbāx), トゥマンシャー (Tūmānšāh) の国, カイタク, クムク山地である [cf. DN: 7-8, 31-33]。

この分割 [方法] は、現在の状況とも完全に一致している。すなわち、第1の王国はアラン、もしくはゲルバフ、[すなわち] スラク [川] の向こう側のクムク (Qomūq-e ān ṭaraf-e Sūlāq)²⁹⁾ であり、ミチキチ (Mečekeč) や小カバルダ (Qabārṭi-ye kūčak) に該当する。第2の王国は、トゥマンシャーの国、あるいはハプタグ、あるいは最初 [に挙げたマスウディー] の分割 [方法] に従うならカイタクであり、シャムハル (šāmxāl) の国、及びウスミ (ūsmi)³⁰⁾ の国の下地区に該当する。第3の王国は、クムクの山岳地帯、あるいはフ

27) ロシア語版では、「ダルヤルは、パフラヴィー語で『英雄たちの門 (Вопота регов)』を意味している」となっている [ГИ: 13]。

28) この人物とその歴史書に関しては、ミノルスキー氏の研究を参照 [Minorsky 1958: 8-9]。

29) 「向こう側」というのは、シルヴァーン地方やダゲスターン地方南部から見た向こう側、すなわち、スラク川の北西方面を意味している。この箇所は、ロシア語版でも、「スラク [川] の向こう側のクムク (Засулакский Кумук)」である [ГИ: 14]。このことから、ロシア語版の対象読者は東コーカサス地方に居住するロシア語話者であった、という推測も成り立つだろう。

30) シャムハル、ウスミともに、ダゲスターン各地の地方君主が伝統的に名乗った称号。17世紀後半から19世紀前半における彼らの状況に関しては、Pūrşafar 1377 s: 22-38, 71-82 を参照。

ン、あるいはアヴァルであり、カズィ・クムクの国とアヴァル人の国 (Āvārestān) に該当する。第4の王国はバスラス、あるいはズリフゲラン、あるいはサリル、あるいは最後 [に挙げた『ダルバンドの書』] の分割 [方法] に従うならカイタクであり、カイタクの上手の諸地区とアクシャ (Āq-qūše) とスルヒ (Šūrḥī) に該当する。

バシュリ (Bāšlī) という町の名は、バスラスが変化したものである。また、クムクとは、プトレマイオス (Baṭlamyūs) の言によれば、カーム (Kām) 族とキャマーク (Kamāk) 族の末裔であり、彼らの名から、国 [の名] が付けられた。また、『清浄の園 (Rowḡzat al-ṣafā)』の著者 [cf. RŞ: 68] やその他の人々が記すところによれば、彼らはヤベテ (Yāfet) の息子であるところのキャマーク、あるいはキャマーリー (Kamāri) の一族である。彼らは、彼の息子の名にちなんでバルガル (Balgāl) と名付けられた場所に居住することとなった。小カバルダの国に存在するバルカル (Bālgāl) という場所が、まさにそれであろう。チェゲム [族] (Čakam), バクサン [族] (Bāxsān), ビゼンガ [族] (Bezangi) などといったバルガルとその周辺の住民たちは、いまだにテュルク語群 (zabān-e Torki) のクムク語 (eştelāh-e Qomūq) を話す。彼らは1つの部族であることが知られている。『諸伝記の伴侶 (Ḥabīb al-siyar)』などの内容に従えば、アミール・ティムール (Amīr Teymūr) はトクタムシュ・ハーン (Toqtamış Xān) を破った後、(p. 10) クマリ (Qomāri) 川の河畔で軍の指揮官たちに褒賞を与えた。そして、クム溪谷 (Būgāz-e Qom) において冬営した [cf. HŞ: III. 463–467]。キャマーリー [族] に [名の由来が] 帰せられるこの川は、テレク川の付近にあったようで、現在でもテュルク語でそれをキュミ (Kūmi/Kumi [Əskərli (tr.) 2000: 8]), ロシア語でクマ (Qūmā/Kыма [ГИ: 15]) と呼んでいる。アリフ [i] はヴァー [j] と [発音が] 似ており、カーフ [k] とガーフ [g] とガイン [ğ] とは、それぞれ [発音が] 遠くない。

また、カイタクとハプタクが同一のものを指しているか、同じものから変化したこと、あるいは [これらの語に含まれる] 「タク」がダゲスターン [の「ダグ」] と全く同一のものであることも、想像することができよう³¹⁾。シャムハルの国は、[前述の「タク」に] 「全て」を意味する「ハプ」が付いてハプタクであり、ウスミの国は、カヤーニー朝 (Kayān) の諸王との関係を示す、あるいは「大きくて高い」という意味の「カイ」が付いてカイタクなのだ、と言われている。ター [t] の使用箇所がダール [d] に、カーフ [k] やガイン [ğ] の使用箇所がガーフ [g] になったり、その逆に変化したりするのだ。

また、フン族とは、まさしくグン人 (Ġūn) のことであろう。モヴセス・ホレナツィの言によれば、彼らは西暦5世紀、ハザルの海の西岸に居住していた。いまだにその位置が知られていないヴァルチャン (Vārčān) の町が彼らの町々のうちで最大であった。この醜く、

31) 「タク (tāg)」ないし「ダグ (dāg)」は、テュルク諸語で「山」を意味する。

血に飢え、掠奪を生業とする、向こう見ずな部族は、古代に中国（Xatā）の境域からキプチャク（Qepčāq）草原に、またハザルの海と黒海の間〔の地域〕へとやって来て、多くの悪行を行った。彼らの王アッティラ（Āttelā?）は、権勢と権威の絶頂にあり、貪欲さと怠け知らず〔の行動力〕に基づいた相次ぐ征服によって、ハンガリー³²⁾に到るまでの様々な部族を自身に従わせ、コンスタンティノーブル（Qosṭanṭaniye）から〔も〕税を徴収した。彼は〔西暦〕454年に死去し、グン人の政権は、彼の子孫たちの争いのために終焉した。

西暦4世紀の歴史家、アンミアヌス・マルケリヌス³³⁾は、次のように言っている。「グン族は、あごひげが生えるようになるまでに、自分たちの顔にナイフで切れ目を入れている。彼らは概して醜く、首が太く、けだものに似ている。植物の葉や根、あるいは生肉を鞍の下で温めて食べる。家を持たず、持とうともしていない。彼らは、荒野や山や森で暮らしている。彼らの服は、亜麻とケダモノの皮でできており、彼らの体に〔直に〕着けられる。彼らは、暑さや寒さ、空腹、喉の渇きに自身を慣れさせている。全体の打ち合わせの時に〔だけ〕、馬の背から降りる。（p.11）彼らには、恥を知ることも品行の方正さも無い。掠奪を生業とし、血に飢えており、無法者で、嘘つきで、不信心である。」

アッティラに謁見したローマの使節団の1人であったプリスクス³⁴⁾は次のように語っている。「我々は、野営地で彼と面会した。彼は、ローマ皇帝（qeyšar）からの贈り物を極めて高慢な態度で受け取り、ある町まで同行するよう、我々に命じた。休息する時、彼はそこに滞在するという。白い長衣を着た娘たちが彼の出迎えにやってきて、スキタイ（Asqif?）の言葉で詩をいくつも詠んだ。彼は、木製の柵で囲まれ、高い場所にある木造の建物を所有していた。彼は毎朝、この家の門のところに座り、民衆の裁判（divān-e xalq）³⁵⁾を執り行っていた。昼には種々様々な民族の使節たちと面会し、夕には彼らと一緒に食事をとっていた。宴に集められた人々には、飲み食いするために銀製の器と黄金製の盃が、そして彼自身には木製〔の器と盃〕が差し出されるのだった。食事の後には、グン人の詩人たちがやって来て、彼の勝利の数々を謳った詩を詠んでいた。このようにして彼の兵隊たちが上機嫌に振舞っている一方で、老人たちは争いごとに疲れ果て、悲しみにくれて泣いていたものだ。」

32) 通例、ハンガリーを指す言葉として、ペルシア語では「マジャーレスタン（Majārestān）」、オスマン語では「エンギュリュス（Engürüs）」が使われる。しかし、ここでは、それらの語ではなく、「ヴァングリヤー（Vangriyā?）」という語が使われている。これは、ロシア語名「ヴェングリヤ（Венгрия）」の音写形と考えられる。なお、現代アゼルバイジャン語では、ペルシア語名に由来する「マジャールスタン（Macaristan）」が使われる。

33) Ammianus Marcellinus (ca. 330–395)。ローマの歴史家。原文では、Āmmiyan Māršallin。ロシア語形 Аммиан Марцеллинの音写であろう。

34) Priscus (5 c.)。原文では，Prisq。ロシア語形 Приск [ГИ: 16] の音写であろう。

35) divān という語は様々な意味に解釈しうるが、ここでは、ほぼ確実に「裁判」の意味で用いられている。ロシア語版の該当箇所が「民と面会し、裁判（суд）を行っていた」[ГИ: 16] となっているのが、その根拠である。

アッティラは、常にしかめっ面をしており、考えこむことが多く、口数が少なかった。手を慰めるために、自身の幼い息子の頭をよく撫でていた。占星術師たちは、「[我々の] 術によると、彼は父親の後継者となります」と言っていた。彼の[軍の] 隊長たちの馬や武具や服は、黄金と宝石によって飾られていたが、彼自身[の馬や武具や服に] は、何も[装飾が] なかった。その公平さと偉大なる性格のために、彼は、グン族のみならず、彼に臣従する全ての部族に愛情を注いでいた。ローマ人の多くもまた、彼へと仕えるようになっていた。アッティラ自身はとりたてて醜悪というわけでもなく、男気にあふれ、大望の炎を燃やしていた。[ある時、] ローマの使節団のうちの1人が彼の殺害を考えた。アッティラはそれを知ったが、軽蔑して、彼の処刑は行わなかった。イティル川 [=ヴォルガ川] は、アッティラから名付けられたか、[アッティラが] この川の名から名付けられたのだろう。

山岳地帯の人々にレズギ (Lazgī) の名が与えられたのは、彼らがラズ (LAZM?/лазы [ГИ: 16]) の民と混合したためだろう。ラズの民は、西暦3世紀後半に、コルヒダ (Kūl-xidā) に定住していた。[その後、] サルマート (Sarmāt) の王がキプチャク草原からやって来て、彼らを打ち破った。[西暦] 5世紀には、アルバニア人 (Ālbāniyān) やイヴェル人 (Īvariyan) とともに、ローマとイランの長きにわたる戦いに参戦した。[西暦] 6, 7世紀には、彼らの政権は確固たるものとなった。彼らの王たちのうち、グーバーズ (Ġūbāz) とフーリヤーン (Xūriyān) は令名をはせる者となった。今でも、この部族の末裔が黒海の南東岸に住んでおり、自分たちの名を (p. 12) 書き下す上では、「ラーゼギー (Lāzeqī)」と書いている。

歴史家たちの大部分は、アルメニアとイヴェリア (Īvariya) とコルヒダとアルバニア (Ālbāniya) を正しく区別していない。そのために、いくつかの食い違いが生じている。数々の類似[の言説]を比較対照することで総合的に判断すれば (banābar-e taṭbīq-e qar-āyen eḥtemāl-e kolli mī-ravad), キュル川の右[岸]側は、アラズ (Aras) 川との合流地点まで[全て] アルメニアであった、ということになろう。実際、[大] プリニウス³⁶⁾やプトレマイオスも、アルメニアの北の境界はキュル川によって引かれる、と記している。キュル[川]の右[岸]側——[現在、] ここには、トビリシ、ドゥマニス (Tūmānes), ブリス (Būlis)³⁷⁾ などがある——は、「ソムヘティア (Sūmxat)」と名付けられている。これは、グルジア語で「アルメニア人の土地 (Armanestān)」を意味し、現在でも、そこでは数においてグルジア人よりアルメニア人の方が多い。

『諸伝記の伴侶』の記述によると、ハビーブ・ブン・サルマ³⁸⁾は、ウスマーンのカリフ時

36) 原文では Plinī. ロシア語形 Плиний [ГИ: 17] の音写であろう。

37) ロシア語版では、「ブニス (Бунис)」となっている [ГИ: 17]。

38) 原文では, Ḥabīb b. Salmī となっているが、正しくは Ḥabīb b. Salma。また、ハビーブ・ブン・マスラマ (Ḥabīb b. Maslama) とも。

代に、[当時] アルメニアに含まれていたトビリシを占拠した [cf. ̤S: I. 500]。[それ以来、トビリシは] 常にカリフたちの支配のもとにあった。実際、トリビシでは、アラブ人によって打刻されたディルハム硬貨が知られている。

イヴェリアは、ダゲスターンの西側の山地にあり、[現在における] バシャチュク (Bāš āčūq)³⁹⁾ の東部にあたる。実際、アルメニア人の歴史家たちは、古代グルジア (Gorj-e qadime) を⁴⁰⁾ 「山岳地帯」を意味する「イヴロス (Īvrūš)」と読んでいる。

ヤークート (Yāqūt) の記述によると、グルジア人たちは、ヒジュラ暦5世紀の後半から、イランの情勢の騒乱のために、キュル川の右岸において殺戮と掠奪を始めた。結局、セルジューク朝のスルターン・ムハンマド (Solṭān Moḥammad-e Saljūqi) の息子たちであるスルターン・マフムード (Solṭān Maḥmūd) とスルターン・マスウード (Solṭān Mas'ūd) の間で争いが起こった時に、[トビリシは] グルジア人たちの占有下に入った [cf. Yāqūt: I. 858–859]。

バシャチュクとミングレリア (Mengraliyā) とグリア (Gūriyā) の平野部が、[古代における] コルヒダのこととみなしうる。また、シルヴァーンとダゲスターンは、まとめてアルバニアであった。

また、アラン族に関しては、以下の程度のことが知られている。すなわち、彼らは、この一帯の住民であり、固有の王をいただいている。また、アランとアルバン (Ālbān) [=アルバニア] という語の類似から、次のように想像されよう。すなわち、一方がもう一方から派生したものであるか、あるいは、アルバニアは「白」[を意味する語] から派生したラテン語 (eṣṭelāḥ-e Rūmī) であって、「自由」を隠喩しているか、である。そして、シルヴァーンとダゲスターンは、自由の民が住む所 (diyār-e āzādān) として知れ渡っている。

アンミアヌス・マルケリヌスの言によると、アラン族は、古代のマサゲト (Māsaqaṭe) の末裔であり、最初はタターリスターン (Tātārestān) からやって来て、スキタイ族をハザルの海の東岸から駆逐し、(p.13) [その地に] 居住するようになった。[そのため、] スキタイ族は、イティル川を渡って、ドン (Ton) 川からドナウ (Ṭūnā) 川までを占有した。彼らは、多種多様な諸部族 [の集団] であり、勇猛かつ野蛮であり、遊牧民の特性を持っていた。南方の歴史家たち (movarrexān-e jonūbi) は、この方面 (ān aṭrāf) の古代の住民を、全て「スキタイ」と呼んでいる。ヘロドトス (Harodūt) が言うには、スキタイ [族] の若い男たちとアマゾン [族] (Āmāzūni) の娘たちが混ざり合って、サルマート族が形成

39) すなわち、イメレティア (Имеретия, Īmeretiya) [cf. ̤И: 17; ̤skərli (tr.) 2000: 9]。

40) GE 2 は、この部分を「歴史家たちは、古代グルジアのアルメニア人たちを (movarrexān, Arāmene-ye Gorj-e qadime)」と読んでいる。しかし、ロシア語版から、この読みが間違っていることが分かる [̤И: 17]。

された。一方、ガッテレル⁴¹⁾は、以下のごとく論証している。サルマート族は、西暦紀元前80年にアジア (Āsiyā) からヨーロッパ (Orūpā) にやって来た。ドン川流域でスキタイ族と混合し、徐々にスキタイの名は消えていき、サルマートの名が知られるようになった。

[その後、] アラン族がやって来て、サルマートを敗走させ、彼らの土地を占有下に置いた。アランの民は、剣を崇める信仰を有していた。それ [= 剣] を地面に突き刺して、跪拝するのだった。彼らの習慣の多くは、グン族のものと同じものであった。プロコピオス⁴²⁾は、「アランの民はマサゲトの末裔であり、マサゲトはゲト (Qat), あるいは、『大ゲト (Qat-e bozorg)』を意味するゴトゥフ (Qūtf?) の末裔である」と言っている。また、『エゼキエル書 (ketāb-e Ĥezqil nabi)』38章には、「マソグ人 (Māsūqiyān) は、ヤベテの子マソグ (Māsūq) の末裔であり、北東の諸部族の間では、名を知られた部族である」[、と記される]⁴³⁾。また、マサゲトはこの〔部族の〕末裔であるか、マソグ族とゲト族の混合によって形成された、ということもありうる。また、ド・ギニエ⁴⁴⁾は、「アランという語は、『山』を意味する『アーリーン (Ālīn)』から派生しており、太古の時代、マサゲトの一派がアルタイ (Āltāy) の山々に居たという理由でこのように名付けられている」[、と言っている]。モヴセス・ホレナツィは、「アラン族はコーカサスの近く [にいる]」、と書き記している。彼らは、プトレマイオスの時代から、[西暦] 14世紀まで、コーカサス山地の北西側において、名を知られてきた。

マスウーディーの言によるなら、「アランの門」は、グルジアのダルヤルの地にあるはずである。しかし、『ダルバンドの書』の著者が言うには、「アランの門」は、「アルゴンの防壁」にあり、イスファンディヤールがそれを築き、ヌーシーラワーンが再建した [cf. MD: 202-203; DN: 32]。上述の防壁の遺構と門の跡 (jā), 町の遺跡は、グバ [地方] のシャブラン (Šābrān) 地区にあるギルヒン (Kelhīn) 川の左岸にある。また、砦の跡は、今でも、この川の右岸にある丘の上に存在している。この防壁は、海 [の中] から始まり、アリハンル (‘Alixānlū) —— おそらく、元来はアルゴンル (Ālgūnlū) であったのだろう —— の村の上を通過して、上述の町の跡の近くに現れ、チラグ (Čerāg) 城に連結している。そして、その地から、アタ (Ate) 山 —— そこには大きな町の廃墟があることも知られている —— を越えて、ゴナフケンディ (Qūnāq-kandī) 村の上を通過して、ババダグ (Bābādāgi) 山ま

41) Johann Christoph Gatterer (1727-1799)。ドイツの歴史学者。原文の表記はGättarar?。ロシア語形 Garrepep [ГГ: 17] の音写であろう。

42) Procopius (ca. 500-)。東ローマ帝国の歴史家。原文の表記はPrākūpī。ロシア語形 Прокопий [ГГ: 18] の音写であろう。

43) マソグは、『旧約聖書』に見られる「メシェク」のことであろう。『エゼキエル書』38章1-3節の他、『創世記』10章2節、『歴代誌(上)』1章5節なども参照。

44) Joseph de Guignes。18世紀フランスの東洋学者。原文の表記はDagīn。ロシア語形 Дегинь [ГГ: 18] の音写であろう。

で (p.14) 行く。

数々の言説を比較対照することで、次のように想定することが可能である。すなわち、「アランの門」は、グルジアにもシルヴァーンにもあった。というのも、コーカサスの北側にいたアラン族は、[グルジアとシルヴァーン] どちらの方面を経由する襲撃ルートも有していたからである。アランの名は、確かに、アルメニア人の多くの書物で名を知られ、コーカサスの東側のあちこちにいる山岳民全体のこととみなされ、ムガン平原 (*ṣaḥrā-ye Mogān*) の北部にまで [分布していた]。ムガン平原は、シルヴァーン地方の端に位置するとみなされ、また、古代の書物においては、アラン平原として知られている。そして、アルバンの町は、歴史家たちがアルバヌス (*Ālbānūs*) 川とカッサ (*Qāssī*) 川の間にあると記しているが、[その] 位置関係や地勢を考慮すると (*naẓār be-monāsebat va vaḡ'e makān*)、[現在の] ダルバンドであるに違いない。アルバヌス川は [現在の] サムル川であり、カッサ川は、タルキとブイナク (*Būynāq*) の間を流れるマナス [川] (*Manāṣ*) であろう。

この一帯の地名の一部は、年月の流れを経てもなお (*morūr va dohūr nā-maḥṣūr*)、いまだ [ほとんど] 変化していない。[例えば、] シャマフ (*Šamāxī*) の町は、まさしく [古代における] キアマフ (*Kamāxī*)、あるいはクサマフ (*Ksamaxī?*) である。同じ場所にあるガバラ (*Qabale*) は、プトレマイオスが言及しているところのハバラ (*Xābālā*) であると思われ、[現在は] グバの王国にある。また、アルパン (*Ālpān*) は、アルパンから変化した村の名であろう。また、ある山の頂には、非常に古い城が存在するが、これは、アシュケブス (*Aškabūs*) 城と呼ばれている。アシュケブスとは、フェルドウスキー (*Ferdowsī*) の言によると、『王書 (*Šah-nāme*)』におけるトルコ人の勇者であり、ハカンとの戦いにおいて、ロスタムの手で殺された [cf. *Ferdowsī*: 831–835]。また、ハムドゥッラーが『諸都市辞典 (*Mo'jam al-boldān*)』で記している証拠の数々によるなら、ザルグバド (*Zarqobād*) 村は、[元々] フィールーズ・クバード (*Firūz Qobād*) という町である⁴⁵⁾。また、サーダン (*Sa'dān*) 村は、サダーネ・バークーイー (*Sa'dān-e Bākūyi*) という名に [由来し]、ハズラガン (*Xazragān*) 地区とは、『イस्कन्दル・ナーマ (*Eskandar-nāme*)』で記されるところのハズラーン・クーフ (*Xazrān Kūh*) であろう⁴⁶⁾。また、グバにあるジャガタイ (*Jaḡatāy*) 村とダゲスターンにあるジャングタイ (*Jangūtāy*) は、[元来] モンゴル語であり、その地の古代の住民の名から [ついた地名である]。ミチキチにあるバヤン (*Bāyān*) 村は、著名なアヴェール人であるバヤン・カガン (*Bāyān Xān*) の名か

45) ハムドゥッラー・ムスタウフィー・カズヴィーニー (*Ḥamd Allāh Mostowfī Qazvīnī*) は、その作品『心魂の歓喜』でフィールーズ・クバードに関する情報を記している [NQ: 92]。その際、ヤークート『諸都市辞典』から情報を引用している [cf. *Yāqūt*: III. 929–930]。『諸都市辞典』をハムドゥッラーの作品としているのは、バキューハノフの誤りであろう。

46) *Neẓāmī*: 1097, 1100 が該当するか。

ら名付けられている。[現在の] ヌフ (Noxūy) の町は、名前の関連性とその地勢とを考えると、まさにナヒヤ (Nāxiyā) あるいはナギヤ (Nāgiyā) であろうと言われ、古代の歴史書の数々において、シルヴァーンの国の一部と (p. 15) みなされている。

古代、カスピ (Qāspī) という名の部族が、[ハザルの] 海の海岸沿い、キュル川の右岸に居住していた。ローマ人たちの間では、[ハザルの] 海は、彼らの名によって命名されている。イスラームの民の間では、その沿岸にある諸地域 [の名] に結びつけられ、「ハザルの海」や「ゴルガーンの海 (Baḥr-e Jorjān)」, 「ギーラーンの海 (Baḥr-e Gilān)」, 「シルヴァーンの海 (Baḥr-e Šīrvān)」として知られる。

カフカス [=コーカサス] という語は、まさにこのカスピ族の名とカーフ (Qāf) 山 [の名] から合成されたものである。カーフ山は、『聖クルアーン』においても言及 [され]、驚異に満ちた場所 [とされる]。様々な空想物語の本においては、悪鬼たちと妖精たち (divān va pariyān) の安寧の地である。これらの本では、妖精たちの王は、「シャフバール (Šahbāl)」と呼ばれる。『ダルバンドの書』の著者は、アラブの軍勢がダゲスターン [征服] に任命した将軍を、シャフバールあるいはシャー・バール (Šāh Ba'al) と呼んでいる [cf. DN: 101]。現在でも、シャムハルの王国には、全ダゲスターンのうちで傑出して美しい人々が住む村々があり、その1つは、「ペルアウル (Par-awl)」という名を有する。[元来] これは、「パリー・アーヴォル (Parī-āvol)」, すなわち「妖精たちの村」である。

「エラムの薔薇園 (ゴレスターネ・エラム)」は、この上ない歓楽と愉悦に満ち、様々な川と、実りの多い木々によって飾られ、カーフ [山] の近くにある、と [書物に] 記されているが、グバのシャブランの清らかさに満ちた平野 [がそれに該当するもの] であるかも知れない。実際、この説は、多くの人々の間でよく知られている。また、「エラムの薔薇園」とは、ガラバークにあるゴレスターン (Golestān) という名の場所である、と言う者もいる。この地では、ロシアとイランの両政府の間で [ヒジュラ暦] 1228 年 / [西暦] 1813 年にゴレスターン条約が結ばれている。また、ここより高所の山地にある夏営地は、現在でも「ゴレスターネ・エラム」と呼ばれている。

イスラームの歴史家たちの大半は、コーカサスの山々のことを「アルボルズ (Alborz) 山」と呼んでいる。例えば、カーティブ・チェレビー (Kāteb Čalabī) は、『世界を映す書 (Jahān-namā)』において、次のように言う。「アルボルズは、『諸門の門 (Bāb al-abvāb)』, すなわちダルバンドの西側にある。山脈に連なる山で、トルキスターン (Torkestān) からヒジャーズ (Hejāz) まで、1,000 ミールにわたって延びている。そのため、これこそカーフ山であると考えている者もいる」[JN: 398]。

ダルバンドの近くには、山地の中に2つの支脈 (šo'be) があり、そのうちの1つが「大カーフ (Qāf-e bozorg)」, もう1つが「小カーフ (Qāf-e kūček)」と呼ばれている。アラブの古代の地理書では、この山脈は、まさしくそこで起こった諸々の戦いと勝利のために、「勝利の山々」として知られている。

上述のもの以外の多くの類似 [の話] もまた、(p. 16) カーフ山がまさにこのコーカサスの山々であることを示している。数々の物語に記されたその特徴のいくつかは、暗喩の類に属し、別の箇所 [記された特徴] は、全くの空想 ('adam-e eṭṭelā') である。[そうってしまったのは、] 先人たちが、この驚異に満ちた山々の [山] 中やその北の方面の様子を正しく把握していなかったためである。もしも、こういった事情で、その地を居住可能地域の最果て (āxer-e ma'mūre) と考えたならば、その地の屈強な体格で野蛮な性格の住民たち⁴⁷⁾を「悪鬼」と、その秀麗さと端正さを世界の端々 (āfāq) で知られる [この地の] 美しい人々を「妖精」と名付けた、[という推測は、真実から] 遠くなかろう。

数多くの旅行者たちが世界中の諸地域を繰り返し探査し、東西の大洋を渡り、地球の裏側にあるアメリカ大陸 (eqlim-e Āmriqā) さえも詳しく知られている現代において、カーフ山は、次のように説明されている。すなわち、それは、空想を織りなす純朴な人々 (sāder-lowḥān-e vāheme-bāf) が考えたものであって、どこにも存在しないのだ、と。

未知なる古代の諸時代から、数多くの種々様々な部族がこのコーカサスの地において、戦争や征服や、北から南、あるいはその逆の往来を行ってきた。また、この地の諸王国の多くを占有し、居住してきた。様々な民族の逃亡者や被虐者が、この地の通行困難な場所で、敵の追跡から心を安めてきた。イランの古代の王たち、とりわけ、ヤズデギルド・ブン・バフラーーム・グール (Yazdgerd b. Bahrām-e Ġūr)⁴⁸⁾ やヌーシーラワーン・ブン・クバードは、他の諸地方から多くの部族を連れてきて、数々の城や建物をこの境域に建設してきた。その廃墟の多くは、今も存在している。ギリシア人、ローマ人、ペルシア人、アルメニア人、ゲン人、アヴェール人、トルコ人、ルス人、ハザル人、アラブ人、モンゴル人、タタール人といたった様々な集団が、この [地方の] 諸々の土地を自らの占有下に置いてきた。とりわけ、シルヴァーン地方は、他のどの地方よりも騒乱の原因となることが多く、サファヴィー朝の時代には、イランとオスマン朝の軍勢が、何度も入れ替り立ち替り、この地を占有してきた。

この一帯の人々の血統は、様々な部族 [の血統] の混合であることが知られている。実際、[その] なごりや、[古来の] 名前、言語、習慣を、彼らの多くが残している。住民たちの性質や能力の等級それ自体が、そのことに対する明瞭な証拠となっている。

しかし、それらを仔細に確定することは、不可能である。以下のことが言える程度であろう。つまり、タバサランの一部や、グバの西側部分、サムル川流域、キュレの人々は、主に、様々な諸部族と混ざり合った古代の血統に属している。そして、ダルバンドの近郊、タバサランの大半、グバの王国の東側部分、シャキ、バクー、シルヴァーン⁴⁹⁾、(p. 17) サリヤンの住民は、ペルシア人、アラブ人、モンゴル人、タタール人 [の血統] が混ざり合った人々

47) 写本に従った [M-49: 8a; B-2268: 6b]。

48) ササン朝君主ヤズデギルド II 世 (r. 438-457)。

49) ここでいう「シルヴァーン」は、シャマフとその周辺の地域のこと。

である。[この地で] 暮らしてきたアルメニア人やユダヤ人も、その大半が時代の経過とともにイスラーム教徒と混合した。彼らは、タバサランやダルバンド、バクー、グバ、キュレの各王国に非常に少数、シルヴァーンとシャキには比較的多く居住し、固有の宗教と言語を有している。様々な人々が混合した血統が残っていることに対しては、多くの部族や村々が現在でも自身特有の名称と言語を有していることが明白な証拠である。

バクーの王国には、ズフ (Zix) の村があるが、ダゲスターンに [も] ズフの部族の末裔であるミヤトル (Miyātlū) [族] がいる。ミヤト (Miyāt) に関しては、[大] プリニウスやストラボン (Estrābūn) が彼らをこの一帯の古い住民の1つと記している。シャキやシルヴァーンやグバにいるウディル [族] (Ūdilū) は、ウディ (Ūdi) の町の住民の一部であったのだろう。ウディは、西暦3世紀に、アルメニアの王たちの首邑であった。インディリ (Enderi) には、トゥマンラル (Tümānlar) と名付けられた地区 [がある]。彼らは、現在でもゴイス [川] (Qūysū) の右岸からテムルグユ (Teymūr-qūyī) までの諸々の地所や河川を所有しているが、そもそも最初からこの地に居住していたのである。トゥマンラルの村と同様に、バシュリの近くに、トゥマンシャーの民の末裔であろう [人々がいるが]、ヌーシーラワーンが彼らを [その地に] 住ませたのである。クバチの民は、彼らの先祖たちの言葉によれば、ジェノヴァの民 (tāyefe-ye Janaviz) とユダヤ人からなる集団で、交易のためにやって来て、その地に仕事場を建設した。そして、時の経過とともに、[元とは] 異なる集団へと変わっていった。また、タバサランの人々の多くは、ヌーシーラワーンがタバリスターン (Ṭabarestān) とイスファハーン (Eṣfahān) から連れて来たため、この地域の名前もまた、タバリスターン⁵⁰⁾から変化したものと考えられる。

また、アラブ人は、グバの2つの村、ダルバンドの1つの村、シャキの2つの村 [に居住している]。シルヴァーンには大きな部族集団があり、そのうちの1分派は、自分たちの間で、現在でもアラビア語で会話をしている。また、タバサランのダルヴァグ村でも、アラビア語が用いられていたが、つい最近になって、放棄された。[しかし、] その村の老人たちの一部は、今でもその言語を覚えている。これらの諸王国に加えて、キュレ、タバサランといった王国や、サムル川流域では、ダゲスターン全域と同様、自分たちの書き言葉として、アラビア文字とアラビア語を用いている。(p. 18)

グバのバルマク (Barmak) 地区 [の人々] は、ハールーン・アッラシードの宰相であったバルマク家のジャアファル (Ja'far Barmakī) の一族である。彼らは、ジャアファルの処刑の後にやって来て、この地を避難先を選んだのである。ザングネ (Zangane) 族とハリッリ (Xalillū) 族とケンゲルリ (Kangarlū) 族はグバとシルヴァーンにおいて、ガラマンル (Qarāmānlū) 族とタカリ (Takalū) 族とシャムル (Šāmlū) 族とチャケルリ (Čāk-

50) 写本に従った [M-49: 8 b; B-2268: 7 a; cf. GE 3: 33; ГИ: 21]。

arlū) 族はシルヴァーンにおいて、オサッル (Ūṣāllū) 族とアルシャリ (‘Alšalū) 族とウスタジャッル (Ūstājallū) 族とガージャール (Qājār) 族はグバにおいて、バヤート (Bayāt) 部族はグバとダルバンドとシルヴァーンにおいて、ガラゴユンル (Qarāqūy-ūnlū) 族とハラジュ (Xalaj) 族はシャキとシルヴァーンにおいて、彼ら以外にも多く [の部族] が [様々な地方において] 知られている。彼らは、テュルクメン人と同様の、様々なトルコ人の一派であり、残りの諸集団はイランや小アジア (Rūm) で居住するようになっている。グバのジャガタイ村 [の人々] は、モンゴル人の末裔である。

サマル川流域のミスキンジェ (Meskenje) 村 [の住民] は、アスタラーバード (Astar-ābād) の境域から [来た人々] で、サファヴィー朝のシャー・タフマースプ I 世が連れて来たものである。かの地方における同じ [名前の] 村は、シーア派に属している。ヘズレ [村] (Həzre) は、「御前 (Həzrat)」から変化した [地名] であるが、そこの人々は、上述の帝王によってイランからグバの王国に連れてこられた。自分たちの祖先であるシャイフ・ジュナイド (Šeyx Joneyd) の墓の近くに居住している。現在、彼らは、スンナ派に属しているのだが、その [村の] 一地区は、今でもシーア派住民の地区として知られている。

サマル川流域にあるミクラフ (Mekrāg) 村の人々や、カズィ・クムクの人々の多くは、ルス一族に属することで知られ、ハザル人による支配の時代にやって来た。彼らの外見的特徴や習慣の多くがそれに対する証拠であるのに加え、カズィ・クムクの人々は、今でも、挨拶の際に、お互いに帽子を脱ぎ、「イズロフ (izrūf/изров [ГИ: 22])」と言う。この語は、「イ・ズダローフ⁵¹⁾」が変化したものであろう。今でも、カズィ・クムクの町や、その周辺地域の一部——この大きな町よりも [住民の血統が] 種々雑多になっている——には、3つの部族が居住している。[それは、] ガッチ [族] (Ġāčči?), メチジェ [族] (Mačča?), クムク [族] である。推測だが、ガッチ [族] はグン人とスラヴ人 (Slāvan) とアヴァル人と (p. 19) ハザル人の血統に属しており、メチジェ [族] は、メッカ (Makke) から変化 [した語] で、アラブのクライシュ族 (ṭāyefe-ye Qoreyš-e ‘Arab) の一員であり、クムク [族] は古代のキャマーク [族の末裔] であろう。

この王国の人々の残りと、アクシャやカイタクの諸地区、スラク [川] の右 [岸] 側にあるシャムハルの国 [の人々] は、主に古い血統に属しており、アルメニア人とペルシア人とアラブ人とトルコ人 [の血] が混ざり合っている。スラク [川] の向こう側のクムクやミチキチ、アヴァル、[その他の] 多数の集団は、純粋なる自由民 (aḫrār-e maḥḥz) であり、古代の血統に属し、北方の様々な諸部族と混合している。

つまるところ、この雄大さに満ちた山においては、理解できない固有の言語を持った未知

51) ロシア語版の該当箇所は、「здоров」となっている [ГИ: 22]。原文の表記は「イーズダローフ (Īzdarūf?)」で、これは恐らくロシア語の「やあ、ご機嫌よう (и здоров)」の音写であろう。

の集団の1つ1つが古代の部族の末裔、ということもあり得るわけだ。時代という舞台の様々な年代において、彼らは、数々の征服〔事業〕によって、また巨大な権力によって、よく知られている。[だが、] 現在では、その痕跡が全く存在せず、[ただ] 数々の歴史書において簡単に記されている [だけである]。

カラムズィン⁵²⁾らの記述によると、アヴァル族は、トルキスタン⁵³⁾の荒野において強勢であり、有名であった。中国 (Xatā) の歴史家たちの言によると、彼らはグン人の血統に属し、彼ら〔中国人〕に隣接して〔暮らして〕いた。〔西暦〕2世紀にトルコ族に敗退し、南の方面へと行き、別の諸部族と混合〔した〕。彼らのハーンであるディーザーヴォル (Diz-āvol) は、アッティラのように絶大な権力を得た。アルタイの山中において、何枚もの絹の絨毯と数々の金の器で彩られたテントの中で、ローマ皇帝ユスティニアヌス [I世]⁵³⁾の使者と贈り物を受け入れた。そして、彼と和平し、イラン人を相手に善く戦った。ローマの歴史家たちの言葉によると、ディーザーヴォルの使者たちは、外見や性質が、自分たちの頭を剃らず、長い髪をしていたこと以外は、完全にグン族と類似していた。アッティラの時代〔のこと〕を知らされると、見物人たちの驚きは、いや増した。〔西暦〕568年、彼らは和平を求めてコンスタンティノープルにやって来て、ユスティニアヌス帝に、「勇敢で負け知らずのアヴァル族が、あなたとの友好を望み、褒賞や俸給、住み心地の良い土地をあなたに求めている」と言った。彼は、アヴァル族の要求のどれをも拒絶する勇気がなかった。

アヴァルの血に飢えたカガン (Xān)、バヤンは、ブルガール人たち (Bolġariyān) を破って、殺害や掠奪を怠らず行なった。チェコ人 (Ṭayefe-ye Čah) やその他のスラヴ人が居住していたモラヴィア (Mūrāviyā) やボヘミア (Būgamiyā) を占有し、フランク王シグベルト [I世]⁵⁴⁾を敗退させ、ドナウ河畔まで (p.20) 来て、ランゴバルド (Lūngabārd?) 族と同盟し、ゲピド人たち (Ġabidiyān) の王朝を混乱させた。そして、ハンガリーを占領下に置き、イタリア (Ītaliyā) 征服の考えに至った。〔西暦〕568年、アヴァル人たちの国は、エルベ (Albā?) 川からイティル川まで広がっていた。

バヤン・カガンは、〔西暦〕580年、黒海の北東沿岸部をトルコ人の手から奪った。翌年、6万の騎兵とともにやって来て、その時まで独立していたドナウ河畔のスラヴ族を、殺害と掠奪によって服従させた。年代記者ネストル (Nasṭūr-e movarrex)⁵⁵⁾の言によると、アヴァルのカガンは、〔西暦〕619年、ローマ皇帝ヘラクレイオス (Herakl) を敗北させた。

52) Николай Михайлович Карамзин (1766–1826)。原文の表記は Qarāmzīn。

53) 原文では、Yūstaniyān。ロシア語形 Юстениан [ГЛ: 23] の音写であろう。

54) 原文では、「フランクのガラール、スィーグバルト (Sīgbart, qarāl-e Farang)」。ロシア語版における表記「フランクの王 [=カローリ], スィグベルト (Сигберт, король франков)」[ГЛ: 23] の音写であろう。

55) ロシア語での呼称「年代記者ネストル (Нестор Летописец)」の直訳。

ヘラクレイオスは、ようやく生き延び [たものの]、捕虜となってしまうほど [の敗北] であった。[ヒジュラ暦] 4 年 / [西暦] 626 年、コンスタンティノープルを包囲したが、目的を達成できずに終わった。この部族は、その後、様々な土地で種々の集団と熾烈な戦いをを行い、徐々に弱体化していき、[西暦] 9 世紀初頭には名が聞かれなくなり、別の諸部族と混合した。彼らの墓から入手された多くの高価な物品から、彼らはそれほど野蛮ではなく、イランや中国やローマとの交易関係を有していたことが明らかとなっている。

彼らのうちの一集団は、現在でもコーカサスの山中におり、[他とは] 異なる言語と固有の首領、自分たちの慣習を有している。このアヴェールのカガンは、「アヴェールのウスミ (ūsīmī-ye Āvār)」とも呼ばれるが、[ヒジュラ暦] 1140 年 / [西暦] 1727 年に、ロシアの軍営にやって来て、以下のごとく表明した。すなわち、国をその手から失った彼の祖先の 1 人がロシア皇帝の助力によって然るべき地位に任命された。彼の命令書 (farmān) は、今でも存在している、と。そこでよく調べてみたところ、それはチングス・ハーンの息子ジョチの息子バトゥによる [命令書] であることが判明した。[バトゥは、] ヒジュラ暦 7 世紀にロシアの王国を占有下に置いた [人物である]。

グニブ (Gūneb?) —— しばしば、落ちることのあるバー [𐰽] が加えられる —— の村の住民は、醜い顔で野蛮な性質の部族である。グンあるいはフン [の末裔] であろう。エンデレル ('Andalal) 地区にあるこの村は、多くの田畑や牧草地、河川、森を含んだ、非常に道の険しい山頂に存在し、およそ 100 家族を有する。この村の住民は、性質の悪さで有名で、主に彼ら自身の間で争い、背は低く、顔は醜い。[その性質の悪さは] その地区の他の人々からとりわけ際立つ類のものである。

タバサランにある 8 つの村 —— すなわち、ジャルカン (Jalqān), ルカル (Rūkāl), (p. 21) マガティル (Maqāṭīr), カマフ (Kamāx), ズイドゥナン (Zidiyān), フメイディ (Ḥomeydi), ムタイ (Moṭā'i), ビルハディ (Bilḥadi) —— はアヌーシーラワーンがダグバンドの壁に結合するように建設し、現在でもその遺構が知られている町の周辺にある。古代ペルシアの言語の 1 つであるタート語 (zabān-e Tāt) を有している。彼らは、ペルシアの民であり、その町の滅亡の後、上述の村々に居住するようになったことが知られている。ビルハディの村の付近にあるこの町には、驚くべき技巧が凝らされた門がいまだに存在している。推測するに、「鉄の門 (バーブルハディード) (Bāb al-ḥadīd)」とは、まさにこのことだろう。村の名はそれに由来し、多くの用例で「ビルハディ」となっている。シャマフの町と、グディヤル (Qodiyāl) の町 —— 現在のグバの町 —— の間にある諸地区、例えば、シルヴァーンにあるホヴズ (Ḥowz), ラフジュ (Lāhej), ゴシュンル (Qoṣūnlū) や、グバにあるバルマク、シャシュバラ (Šašpāre), ブドゥグ (Bodūq) の下地区、6 つのテュルクメン人の村を除くバクーの王国の全域では、このタート語を用いている。彼らの起源もまたペルシア人であることが知られている。

また、[他とは] 異なる言語を持つフナルグ (Xenāleq?) 村を除いたグバの王国の西側、サ

ムル川流域、キュレ、タバサランの2つの地区、すなわちデレ(Dare)、エフメルリ(Aḥmarlū)は、固有の言語群に属する様々な言語を有している。テュルク語話者たちは、[その言語を]「モンゴル語」と呼んでいる。『ダルバンドの書』や他の数々の類書の記述によると、この部族は、アランのマサゲトの血統である。バクーにあるマシュガター(Mašqaṭa')村——シーン[ش]がシーン[ش]と変わ[って、マスガターと発音され]ることもある——の人々もまた、この部族に属するのだろう。彼らは、バクーの住民の言語を受け入れたとはいえ、行儀や性質の点では、いまだにこの王国の人々とは異なる美点を有している。

タバサランの残りの諸地区には、また別の言語がある。[上述の村や地区とは]別の4つの村——すなわち、マガルティ(Maḡarti)、マグラガ(Marāge)、フチュニ(Xūčni)、チラグ——や、ダルバンドの[南北]両側にあるウルチュ(Ulūs)[地区]やテレケメ(Tar-akeme)[地区]の全ての村々や、[ダルバンドの]町そのもの、グバ[地方]のティプ(Tip)やミュスキュル(Moskūr)やシャブランといった諸地区や、[グバの]町そのもの、シルヴァーンの残りの諸地区と[シャマフの]町は、サリヤンや(p. 22)バクーにあるテュルクメン人の6つの村、シャキの王国の全域と同じく、テュルク語を有している。[その住民は、]主にテュルクメン人やモンゴル人やタタール人の血統である。一部は、サファヴィー朝時代のオスマン朝とイランの軍勢による戦争の時に、[また一部は]それより後にやって来た。彼らの言語は、テュルク語群に属し、アルメニア地方やアーザルバーイジャン地方の全域、イランの大半に分布しているそれと同様のもので、オスマン語、チャガタイ語、クムク語、ノガイ語の間である(motavasseṭ dar miyān-e eṣṭelāḥāt-e 'Oṭmāni va Jagātāy va Qomūq va Nūḡāy ast)。しかし、それぞれの言語に必須となる綴り字や文法の規則は、いまだにこの[言語]のために確定していない。

ダゲスタンの多数の国々(emārāt)や数々の集団は、多くの言語群と数えきれないほどの言語を有している。端的に言えば、一般的にそれらを5つの言語群[に分類するの]が通例である。第1に、テュルク語群であり、クムク語は、平野部——すなわち、カイタクの下地区、シャムハルの国、クムク——において使用されている。他の諸地域の人々の多くもまた、この言語群[の言語]を有している。第2に、アヴァル語群であり、アヴァル人の国の全域に広まっており、その地の無数の集団の大半が使用している。また、その他の多く[の集団]も用いている。第3に、アクシャの5つの地区の言語群であり、スルヒや、カイタクの上手の諸地区のうちの1つ、クバチ村では、多様であるのみならず[他とは]異なった言語をしゃべっている。第4に、カズィ・クムクの言語群であり、この王国に分布している。第5に、ミチキチ語群であり、例えば、シュブト(Šobūt)やジャルミ(Jarili)⁵⁶⁾などといった、この王国やその上手の地区に特有[の言語群]である。

56) 写本に従った [M-49: 11 a; B-2268: 8 b]。カタカナ転写はロシア語版 [ГИ: 25] に従った。

また、ズンタル (Zomṭāl), バクトゥラル (Baqtolāl), ジャマラル (Jamālāl), アンディブ ('Andeb), カプチャイ (Qāpūčāy), アンツフ (Anṣūx), ジニク (Janeq?), ザフル (Zāxūr), アクバフ (Akvāx), カバルル (Qabālāl) といった集団や、カズィ・クムクに属しているクバチやアルチュブ ('Arčūb)⁵⁷⁾ の村や、それら以外の多く [の集団や村] は、種々様々な言語群や言語を有している。それらの分析は、また別の研究に拠る [必要がある]。

アルメニア人やユダヤ人を除くシルヴァーン地方の住民は全員、イスラームの信仰を有しており、一部はシーア派、一部はスンナ派である。バクーの王国の全て、ダルバンドの大部分、シルヴァーンの半分、サリヤンの全て、シャキとグバの一部は、シーア派である。シルヴァーンの半分、シャキとグバの大半、ダルバンドのごく一部、(p. 23) タバサラン全体、キュレ、ミスキンジエを除いたサムル川流域、ダゲスターンの全域はスンナ派である。この宗派には、さらに2つの分派がある。1つはハナフィー派、もう1つはシャーフィイー派である。グバとシャキとシルヴァーンでは [両派が] 混在しており、サムル川流域やタバサランのキュレ、ダルバンドのスニ派地区は、ダゲスターン全体と同様、シャーフィイー派である。

もし、この一帯における村々や諸部族、諸々の建築物、古代の遺構の数々の様子が仔細に検証されれば、それらの [検証] 結果 (āyene) の1つ1つが、[この一帯の] 住民の血統に対する証拠となるだろう。

む す び

本稿で訳出した『エラムの薔薇園』前文および序章から、バキュハノフの学識のあり方や、彼の歴史・地理認識がある程度明らかとなった。

バキュハノフは、非常に幅広い知識を有していたが、それは、いわゆる“イスラーム世界”の学問にのみ基づくものではなかった。彼は、それら“伝統的”な学問に、ロシア経由で取り入れた“新知識”を融合させた、新しい知識体系を構築していたのである。そもそも、チュルク語話者であるバキュハノフがペルシア語とロシア語でこの著作を行ったということ自体に、19世紀前半のコーカサス地方における学識のあり方が表れていると言えよう。

また、『エラムの薔薇園』においては、シルヴァーン地方とダゲスターン地方との連続性が強く意識される一方で、アーザルバーイジャン地方との連続性は意識されていないことが明らかとなった。バキュハノフは、歴史を共有する1つのまとまりとして、「東コーカサス地方」という地理認識あるいは歴史認識を有していたのである。その一方で、『エラムの薔薇園』においては、「南コーカサス」に該当する地理認識は、ほとんど見られない。

少なくとも、18世紀から19世紀前半においては、南北コーカサス地方という区分法より、

57) 写本に従った [M-49: 11 a; B-2268: 8 b; cf. ГИ: 25]。

「東コーカサス地方」という区分法の方が実態に即した、より有効な区分法である、という主張もなしうるのではなかろうか。以上の私見を示すことで、本稿のむすびに代えたい。

[付記] 本稿は松下国際財団 2009 年度研究助成の成果の一部である。

参 考 文 献

- Abū al-Fidā': *Géographie d'Aboulféda*, ed. Reinaud & Mac Guckin de Slane, Paris, 1840.
- B- 2268: Azərbaycan Milli Elmlər Akademiyası, M. Füzuli adına Əlyazmalar İnstitutu, B- 2268/ 2313.
- BS: Zeyn al-'Ābedin Šīrvānī, *Bostān al-siyāḥe*, Tehrān, 1315 h.
- DN: Anonym, *Derbend-Nāmeḥ, or the History of Derbend*, ed. Mirza A. Kazem-Beg, St. Petersburg, 1851.
- Ferdowsi: Ḥakīm Abū al-Qāsem Ferdowsi, *Šāh-nāme*, ed. Muḥammad Dabīr Siyāqī, v. 2, Tehrān, 1335 s.
- GE 1: 'Abbās Qolī Āqā Bākixānūf, *Golestān-e eram*, ed. 'Abd al-Karīm 'Alizāde, Bākū, 1970.
- GE 2: 'Abbās Qolī Āqā Qodsī, *Golestān-e eram*, ed. Mahdi Karīmī, Tehrān, 1382 s.
- GE 3: 'Abbās Qolī Āqā Bākixānūf, *Golestān-e eram: tārix-e Šīrvān va Dāğestān az āğāz tā jang-hā-ye Īrān va Rūs*, ed. 'Abd al-Karīm 'Alizāde, Tehrān, 1383 s.
- ГИ: Аббас-Кули-Ага Бакиханов, *Гюлистан-и ирам*, ред. З. М. Буниятова, Баку, 1991.
- HE: Amīn Aḥmad Rāzī, *Haft eqlīm*, ed. Javād Fāḡel, v. 3, s. 1., n. d..
- ḤS: Xvāndamīr, *Tārix-e ḥabīb al-siyar fī axbār afrād bašar*, ed. Moḥammad Dabīr Siyāqī, 4 vols., [Tehrān], 1362 s.
- Ibn Ḥawqal: Ibn Ḥauqal, *Opus geographicum*, ed. J. H. Kramers, Lugduni Batavorum, vol. 2, 1939.
- JN: Kātib Čelebi, *Kitab-ı cihan nūma*, facsim. In: *Kitab-ı Cihan Nūma li-Kātib Čelebi*, [Tokyo], 1997.
- M- 49: Azərbaycan Milli Elmlər Akademiyası, M. Füzuli adına Əlyazmalar İnstitutu, M- 49/ 6258.
- MD: Abū al-Ḥasan 'Alī b. al-Ḥasan b. 'Alī al-Mas'ūdī, *Murūj al-ḡaḥab wa-ma'ādin al-jawāhir*, ed. 'Abd al-Amīr 'Alī Muhannā, v. 1, Bayrūt, 1991.
- MT: Abū al-Ḥasan Moḥammad Amīn Golestāne, *Mojmal al-tavārix*, ed. Modarres Reḡavī, Tehrān, 1344 s.
- Nezāmī: *Kollīyāt-e xamse-ye Ḥakīm Nezāmī Ganje'i*, Tehrān, 1351 s.
- NQ: Ḥamd Allāh Mostowfi Qazvinī, *Ketāb-e nozhat al-qolūb*, Tehrān, 1362 s.
- RŞ: Mirxvānd: *Tārix-e rowḡat al-šafā*, v. 1, [Qom], 1337 s.
- TMḥ: Moḥammad Faṭḥ Allāh b. Moḥammad Taqī Sāravī, *Tārix-e moḥammadi: aḥsan al-tav-*

- āriḫ, ed. Ġolām Reḡā Ṭabāṭabā'ī Majd, Tehrān, 1371 s.
- Yāqūt: Šihāb al-Dīn Abū 'Abd Allāh Yāqūt b. 'Abd Allāh al-Ḥamawī al-Rūmī al-Baghdādī, *Kitāb mu'jam al-buldān*, 6 vols., Tehrān, 1965.
- Ахмедов, Э. М. (1983) Выдающийся Азербайджанский мыслитель, *А. К. Бакиханов: сочинения, записки, письма*, ред. З. М. Буниятова и др., Баку, 6 – 59.
- Atkin, Muriel (1980) *Russia and Iran, 1780–1828*, Minneapolis.
- Əskərli, M. (tr.) (2000) A. Bakıxanov, *Gülüstanı-İrəm*, Bakı.
- Əskərli, M. (пер.) (2001) А. Бакиханов, *Күлүстани-ирәм*, [Баку].
- Floor, Willem & Hasan Javadi (tr.) (2009) 'Abbas Qoli Aqa Bakikhanov, *The Heavenly Rose-Garden: a History of Shirvan & Daghestan*, Washington, D. C..
- Hinz, Walther (1970) *Islamische Masse und Gewichte: umgerechnet ins metrische System*, Leiden.
- Minorsky, V. (1958) *A History of Sharvān and Darband in the 10th–11th Centuries*, Cambridge.
- 守川知子 (2007) ロマンスからヒストリアへ —— ビーストゥーン碑文とイランにおける歴史認識 —— 『上智アジア学』 25, 1 – 48.
- 守川知子 (2010) 「イラン史」の誕生 『歴史学研究』 863, 12 – 21.
- Pūrşafar, 'Alī (1377 s) *Ḥokūmat-hā-ye maḥallī-ye Qafqāz dar 'aṣr-e Qājār*, Tehrān.
- 塩野崎信也 (2010) 18 世紀におけるダルバンドの支配者と住民 『東洋史研究』 68 – 4, 1 – 36.

(京都大学大学院文学研究科)